
漆黒の傭兵と火の化身

ととろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の傭兵と火の化身

【Nコード】

N3173N

【作者名】

ととろ

【あらすじ】

世界は死んだ…。どこまでいっても終わりのない世界「レギオス」。
その世界にある森海都市エルバに珍しい黒髪・黒目の一風変わった容姿の青年。

夜神恭介が放浪バスから降り立った。長い時間をかけやって来た割にはどこか浮かない表情…。彼は一体何しにやって来たのだろうか？

最強系、恋愛もの目指します。

…気まぐれな作者なので変わるかもしれませんがご注意ください！

*初めての小説なので、生暖かい目で見守っていただければ幸いです。

！追記！

この話はかなり原作を無視してしまっています。

「原作無視？ありえねえだろ」っていう方は全力で逃げることをお勧めします。

人物紹介（前書き）

宣言通りupします。

イラストは描きましたがひどい出来なのであまり期待せずに見てください。

見たくない人もいる（というかほとんど？）でしょうからURLを貼り付けるだけにしましたが携帯からだちょっとめんどくさいですよね（苦笑）

まあ何かありましたら遠慮なくいつってください。

できるだけ対処したいと思います。あくまで私のできる範囲ですが…。

あっイラストの苦情はなしの方向で。

チキンなので（汗）

長くなりました。

では「みてやんよ」という心優しいお方は次へお進みくださいませ。

人物紹介

・夜神 恭介

長い黒髪に意志の強そうな黒目の青年。出生や生い立ちについては不明で、外見は16〜17歳くらいだが正確な年齢についても不明の謎の多い青年。いつもは長い髪を後ろで一つにまとめている。

ダイトは、片刃で二対の漆黒の大剣に、柄には銀の鎖、鎖の先には分銅がありそれは毒々しい赤い髑髏である。

イメージ画像URL：<http://1591.mitemin.net/i11227/>

・ローエン・シュバルツ

現エルバ市長。年は、今年アラフィフに突入した。濃い緑色の髪にまだ曇りのない蒼眼で顎に髪と同じ色のひげを生やしている。顔もなかなか良く昔の写真はさぞかっこいいだろう。いつも忙しい彼の唯一の癒しは娘の笑顔らしい。

・ジョセフ・フリード

元エルバの騎士団長。しかし今はエルバにある喫茶店「モカ」を妻のメアリーと二人で切り盛りしている。30代後半で、長く戦いをしていないのに敵つい体の強面。髪は茶色の髪をオールバックで、その目は濃い紫色だ。ただなぜか愛嬌があり、慣れてくるといいやつに見えるらしい。

・メアリー・フリード

「モカ」のもともとの店主で15年前にたまたま来たジョセフに一目ぼれをし、ずっとアプローチをかけた末念願になって結婚したそう。年はジョセフよりちょっと若いが何歳と聞くととてもすて

きな笑顔が帰ってくる。少しウェーブのかかった栗色の髪にグレイの目、きれいな顔立ちだ。ジョセフと並ぶとまさに美女と野獣の構図である。

息子が一人おり今は学園都市にいるそうだ。教育方針はジョセフが体罰、メアリーが精神的攻撃だったそう。まあ、強い子に育っただろうが…はたして息子はエルバに帰ってくるのだろうか？

人物紹介（後書き）

これから少しずつ増やしていく予定です。

プロローグ

外は、死の大地。

移動都市で育った子供はそう親から教わっている。
レギオス

事実、人がレギオスより外、詳しくはエアフィールド（浄化機関）
と言われるレギオスを覆う膜から出ると五分と待たずに死ぬ。

だがもう一つ、死の大地と言われる所以がある。

それは、外の大地を支配する王者、生態系の頂点、名を汚染獣―死
の象徴だ。

汚染獣は、年をとるごとに呼び名が幼生体、成体、老成体と変わり、
強さも比例し強くなる。

そしてそれらの汚染獣は人を喰らい都市を滅ぼした。
都市を失った人間に生きる道はない。

人類は滅びの一途をたどっていた。

絶望のさなか、希望のたねが落とされた。

たねは、大地に根付き葉を広げる様にゆっくりと、しかし着実に広
がってゆく。

長い年月をかけ、たねは都市に広がっていった。

たねはいつしか『武芸者』と呼ばれるようになった。

武芸者は、剋脈とゆう通常の人間にはない新たな器官を持ち、剋と
いう力を操ることで汚染獣を倒す。

汚染獣に対抗する唯一の希望のたね。よってレギオスでは剋力のつ
よい、剋の量が多い者が重要視される。

一人の青年が森海都市「エルバ」に来ていた。
長く放浪バスでじつとしていたためか若干の疲れが見える。

年の頃は、16〜17歳くらいだろうか。

その容姿は、この世界ではめずらしい背の中ほどまでのびた長い黒髪と意志のつよそうな黒い目を持っている。

髪や目と対照的な白い肌。整った顔立ちだ。背が高く180cmほどあり、一見するとスレンダーな身体だが鍛え抜かれた筋肉は服越しにもうかがえる。

ふむ、とエルバの市長、ローエンは考えるときのいつもの癖で右手をあごに当てながら、目の前の青年を観察した。

傭兵を雇うために募集かけたのだが、あまりの質の悪さに辟易としていた時だった。

年のわりに落ち着きがあり、ローエンは自分より年上と話しているようにさえ感じる不思議な青年。

この青年は、強い。

そうローエンは思った。

「なぜ傭兵になんて入ろうと思ったんだね？」

そう、ローエンが聞くのも当然だ。

これほど精練された空気を持っているのだ。

たぶん相当な技量の持ち主とみて間違いないだろう。

そんな人物が傭兵をする意味が分らない。

そもそもその様な人を都市が手放すはずがない。

ローエンは裏があると何度もさぐりを入れたがわからなかった。
ならば単刀直入に聞いてやろうと思ったのだ。

「お金がそこを着きまして……。そこに丁度、募集の張り紙を見つけたのもですから。それに、汚染獣だったらたくさん倒してきましたから。」

青年は、頬を掻きハニカミながらこたえた。

ローエンは、あまりに平凡なこたえが返ってきたので、思わず力が抜けてしまった。

そして、急に疲れたようにあごにやっていた右の手でひたいをおさえた。

あのこたえに嘘はなかった。

（・・・こんな事のために小一時間つかっていたのか・・・。）

ローエンは脱力し「君、採用」と言うので精いっぱいだった。

侵入者（前書き）

改行の仕方変えてみました。少しは読みやすくなったかな？

侵入者

彼の名前は夜神恭介という。記憶障害で親は覚えておらず、槍殻都市グレンダンの出身だというが、これはおそらく嘘だろう。彼に質問した時少しだけ目が揺れたのをローエンは見逃さなかった。まあ、そのくらいは些細な事だ、これで一つ仕事がなくなったのだから良しとしよう。だがこれも沢山ある市長の仕事の一つ、はあ、とため息をもらしてまずは書類をかたづけるのだった。

市庁舎からでた恭介はローエンからあてがわれた森の中にあるマンションに来ていた。

マンションはレギオスという外縁部―外界にもっとも近い場所―にある。そして、緊急用シェルターからもっとも遠く、汚染獣に襲われれば逃げられない危険な場所だ。

（まあ、これが普通か）

恭介は自嘲気味に笑いながらマンションに入ってしまった。埃っぽい、彼は眉をひそめながら袖で鼻と口をおさえた。

「明日は、掃除だな。」

掃除はきらいでないが如何せん彼は疲れている。心の中で市長に愚痴を言いながらエントランスに置かれているソファをきれいにして、寝転がり目を閉じるのだった。

朝、日がのぼる前に起きる。昔から恭介は起きるのがはやい。それは、いくら疲れていても関係なくすぐに覚醒する。彼は、ソファから立ち上がると洗面所を探しだし、顔を洗う。そして、鍛錬のため服を着替え、マンションのうらにある開けた場所に出た。

まず、足を肩幅にひらき、目を閉じる。剋脈のある丹田で息をするように深呼吸し、身体に剋を流す。群青色が恭介をつつみ長い黒髪がふわりと浮く。深く、それでいて繊細に荒れ狂う剋を少しずつ髪の毛の一本一本まで流す。だんだんと色が増し、あまりの強力な剋力で彼を中心に土がえぐれていく。彼は満足したのか吸っていた空気を剋とともに吐き出し、剋をおさめた。

（剋の収束の速さも巡りの速さも問題ないな。）

剋には、大きく分けて2つある。一つは、先ほど彼がしたように身体中にある剋路に剋を流し肉体強化や治癒能力を活性化させる内力系活剋、もう一つは、剋を体外に放出し衝撃破に変える外力系衝剋である。土がえぐれたのは身体から剋が漏れたためである。

息とともに剋を吐き出した彼は、腰の剣帯から手のひら大の何かを二つ取り出した。武芸者のための武器――鍊金鋼ダイトである。だが、彼が持っているのは普通の鍊金鋼ではない。とある人物からいずれ起ころうと未来と共に託されたものだ。

その時、突然背後に人の気配がした。

ここは外縁部……人はいないはずである。そして、彼が背後を許すはずがない。考えたのは一瞬……相手の反応速度よりも早く両手の鍊金鋼ダイトに剋を流し記憶復元させ、左に振り返り、両手に発現させた大剣

を一閃させた。しかし斬った感覚はない。ただ、漆黒の大剣の柄尻からのびる銀色の鎖がむなしく音をたてるのみだ。

「誰だ。」

恭介は目の前の男女に右手の大剣を突き付け静かに言った。男のほうは驚いた顔をしたが女のほうは男の腕の中で眠っているようで反応がない。どちらも赤髪のところを見ると兄妹だろうか。しかし女のほうは全裸である。しばし二人を観察していると、男は驚いた顔をやめ口端をあげてにやりと笑った。

「なんだオレと同じやつがいたのか。」

「何？」

恭介は突然現れ意味のわからない事を言われとても不快そうだし、しかし男の方はご機嫌よさげに続ける。

「お前もはずれてるんだろ？」

恭介は驚き目を見開いた。ついで目を細め、目の前の男女を見る。

（女のほうは少なくとも人間じゃない。男のほうもふつつではない何かがある。）

これは、恭介の直感だ。だが、あの発言からしてあちら側を知っている人物であろう。

「何者だ？」

謎の男女（前書き）

うん結構書いたつもりだったんだけど短いなあ。一話に5ページも6ページもかける人すごく尊敬します…。
今回も短いですがおつきあい下さいませ。

謎の男女

恭介は、冷たく言い、男に突き付けている大剣に力を込めた。しかし男は飄々とした態度を崩さず顔に笑みをたたえている。沈黙がその場を支配する。

「それを言う前にその物騒なもんおろしてくんねえか？しゃべりずらくてなんねえ。」

沈黙を破ったのは男のそんな能天気な言葉だった。しばしの膠着があったが、今度は恭介が突き付けたままの大剣を基礎状態レストレーションに戻した事で破られる。だが左手の大剣はまだ記憶復元したままだ。

「動いたら殺す。」

「ああ。別にかまわないぜ。」

ありつたけの殺気をぶつけたが、なおも飄々とした態度を崩さない。あいかわらず女は眠ったままだ。

「貴様は誰だ。なぜあちら側を知っている。」

「オレはディック。ディクセリオ・マスケイン。もとあちら側の住人だ。」

マスケイン…恭介は聞き覚えがあった。マスケインといえば強欲都市ヴェルゼンハイムの王家の家名である。…だがかなり昔に汚染獣に襲われ滅びたはずである。

しかし嘘についている様子はなく、どちらかというと真剣だ。そも

そもそんな嘘つく理由がない。人からものを奪い、奪い取った者の記憶を消す…それが強欲都市なのだから。

「ではマスケインの末裔。それも盗品か？」

恭介は腕の中の女を見ながら言った。左手の大剣がピクリと動き、銀の鎖がかすかに音を立てる。

「おいおいオレ動いてねえぞ？確かに盗んできたがこれはあちら側の兵器―火神だ。」

「火神…？」

恭介は心臓がドクリと脈打つを感じた。あいつが関わっている…。この世界を…家族を…そして俺の大好きな人をうばったあいつが…。恭介は知らぬ間にディックの襟を両手でつかんでいた。左手の大剣は恭介の手を離れ地に突き刺さる。あまりの剣幕にディックは気圧された。

「どこにいる…。イグナシスはどこにいる…。」

地を這うような低い声でディックに詰め寄った。

「まあまあそうピリピリすんなよ。話すからその手をおろせ。」

ディックの言葉で我に返った恭介は驚いた様子で両手をはなし、「すまない、取り乱した」と言っただけから一歩距離をとった。

ディックは首元を少し緩め、そして気だるげに上を向き朝日と反対の向きにある月の方を見ながらぼつりといった。

「あん中さ。あいつはアイレインってやつが月に封印した。」

「封印？殺したのでは無くか？」

恭介は、疑問におもったことを無意識にきいていた。

「そつ。まあ、正確には殺せなかったという方が正しいがな。」

「では、あいつは月で生きているというのか？」

恭介の口調には、若干の疑いがかけられている。

世界を相手にしあまつさえ世界を崩壊する直前まで追い込んだ奴を殺せなかったのは納得できる。だが、ゼロ領域にいた奴を生きたまま封印なんて出来るのだろうか。恭介にはそんな強大な力をもった奴を月に縛りつけているなど信じられなかったのだ。

その問いに対してのディックの答えは半分は予想どおり、だがもう半分は予想もしていないものだった。

「生きてはいない。が、奴の願望の分身ならいるぜ」と、そこで一旦ことばをきりニヤリと笑ってこういった。

「ここに」

ディック（前書き）

今更ですが警告します。

原作無視です。

これを見てまずいと思った方は全力で逃げてください！

もう一度言います

原作無視です。

こんなぐだぐだな小説ですが「読んでやるぜ」という心優しい方は次へお進み下さいませ。

ディック

恭介はディックの言っている意味が一瞬理解できなかった。

（願望の分身…？そもそも奴の願望とはなんだ？それにここに？どういう意味だ…）

「おいおい。少しは反応しろよ。今結構重要なこといったぜ？」

ディックのおどけた声に思考の海から引き戻された恭介は、はつとして顔を上げ、信じられないような顔をしながらディックを見た。

「お前が奴の願望の分身…？」

ディックは恭介の反応を見て満足そうにうなずき、ディクセリオ・マスケインの秘密を語った。

初代マスケインは、人ではない。

イグナシスが叶えようとした願望―世界に自分の存在を認めさせる―そんな強い執念によって造り出された存在…それがマスケイン家

の始まりである。

そこはゼロ領域だ。意志が強ければ強いほど顕現する力が強くなる。マスケイン家は強欲都市を与えられ、そして滅びた。

だが、ディックはレギオスの世界に残ることができた。

それはディクセリオ・マスケインと言う人物を憎む者がいたこと。つまり遠まわしにイグナシスという人物が認められたということだ。そして、システムに取り込まれ狼面衆の一員になったがリントンスと言う男に一度殺されシステムから逃れ、今にいたるらしい。

ということは…

「お前…追われているのか？」

恭介は目の前の男をまじまじと見た。

追われているのには焦っている様子が全くない。

そもそもこんなところでゆっくりしている暇などあるのだろうか。だがディックは呆れた様子で答えた。

「まあな。でも火神を盗んだって言った時点で気付けよ。」

「えっ」

恭介はポカンとした表情をした。

さつきまでの真剣な表情はどこへやら、今はとても間抜けな顔をしている。

どうやら全く気が付いていなかったらしい。

その様子にディックは思わず吹き出し、腹を抱え笑っている。

まさに抱腹絶倒である。

ひとしきり笑ったディックは目の端に涙をうかべ、笑われたことで不機嫌そうな恭介に視線をむけた。

「何を笑っている。」

「いや・・ゲホン。いや、気付くだろうふつつ。」

その子供の様にむっとした表情の彼に、ディックはわざとらしく咳払いをし、笑わないよう耐えた。

そして、ふとディックはあることに気付いた。

「そっぴゃお前さんなんつーんだっけ？」

恭介は話を変えられ、さらにむっとするが向こうに名乗らせて、こちらが名乗らないというのはさすがに失礼だ。

恭介は仕方なくディックに名乗った。

「夜神恭介だ。夜神が姓で、恭介が名だ。」

「夜神恭介ねえ…。異民か？」

急にディックの眼光が鋭くなる。

油断してついしゃっべってしまいそうだったが、寸での所で止め、さきほどまでの無表情に戻る。

「違う。ある研究者によつて時間と力を与えられた。」

「ある研究者、か…聞いてもこたえないんだろ？」

恭介は無言で頷く。

さつきはディックなりに意表を突いたつもりだ。だが彼は思いとどまった。

思いとどまれる程のなにか大切なものがあつたからだろう。だからディックはあえて触れない。

これから長い付き合いになるであろう彼だからこそ。

ディック（後書き）

あつまた改行の仕方変えました。
今試行錯誤中です（汗）

色々変わって申し訳ないです…orz

名前

「んっ」

地面に寝かされていた火神からそんな呻き声がした。
恭介は兵器と聞いていいため飛びのき、身構える。
逆にディックは近づき、どこから取り出したのか獣の仮面を火神の顔に乗せた。

「&%# “%&!?”」

火神からは驚きと共に苦痛の響きがまじった声にならない声が出、
被せた仮面からは青い炎が出てくる。

それとは逆に、火神はだんだんと身体が小さくなり赤子のサイズに
まで小さくなってしまった。仮面からの青い炎はついたままだ。
恭介はあまりの急な展開についていけずただ茫然としている。

「あーこれは駄目だな。ちつとばかり吸いすぎたわ。」

仮面を――よく見ると炎だけでなく仮面の模様も若干だが変わっている――火神から取るとディックはにやにやとし、恭介に向かってそう
つぶやいた。

しかし、目だけは真剣だ。まるで、夜神恭介と言う人物を見定める
ように…。

その恭介はぐったりとしている少女を引き寄せられる様に抱き上げた。

軽い、それが一番初めの感想だった。

だがしつかりとした温かみがあり生きているのがわかる。

そう思った瞬間急に赤子が重く感じられた。

もちろん重くなったのは体重ではない、彼の心だ。

恭介は顔をしかめた。ずっと封印していた記憶を思い出してしまったからだ。

彼は一度頭をふり思考に専念した。

（自分はこの命を救える。だがこれはあちらの側の兵器だ、自分の障害になりかねない。殺してしまった方が絶対得なのだ。…本当か？自分はこの子を殺せば確実に後悔する。そんな状態で約束を守るのだろうか？答えは否だ。しかし救ってどうする？・・・）

だが…、しかし…、と頭の中で葛藤がつづくが決めきれないで低徊している時だった。

下を向いた拍子に腕の中の少女の赤い目と目があってしまった。

いや正確には恭介の目など見ていない。

少女の目は恭介の闇のような色の髪の間からやっと昇った黄金色の光を見つめている。

少女の目は虚ろで何も映していないようだが、そこに光が入り込み赤いきらめき放つ。

しかし今目を閉じてしまえば二度と光を見ることは出来なくなるだろう。

少女もそのことがわかっているのか決して目を閉じようとはしない。

だが疲れが来たのだろう、だんだんと少女の瞼が落ちてくる。
そして、少女が完全に目を閉じそうになった時、この可憐な少女を
群青色の光が包んだ。

少女は今恭介の腕の中ですよすやと眠っている。

恭介は力の一部を少女に分け与えたのだ。

恭介は振り向きディックを睨む様に見る。その目に後悔はなくただ
純粋な安堵とディックに対する怒りだけだ。

ディックもそれを満足そうに、にやりとした笑みを濃くして恭介を
見ている。

「やるよ、それ。」

ディックは恭介の腕のなかの少女に指を差し、そういった。そして、
じゃあなと言うと来たときと同じように音もなくきえる。

「ちよっ」

まあ彼にしては一石二鳥だから問題ない。だが、恭介からすれば問
題おありだ。

「…育てろってわけか？」

恭介はさつきまでディックのいた場所を見ながらつぶやき、腕のなかの少女に視線をおとした。

紅い色の瞳と髪を持つ元火神の少女を見た。

このまま捨てるのはかわいそうだし助けた意味がなくなる。

恭介は、とんだ甘ちゃんだと苦笑した。

名前…考えないといけないな。

何がいいだろうか、女の子らしい名前、赤色だから紅こうかな。でも、ここじゃあ浮いてしまうよなあ。

そんな事を考えていると、少女になって初めて声をだした。

…あー、うー。

少女は寝ているが嬉しそうにそういつて恭介に向かって、小さな手をのばしてきた。

夢でも見ているのか、彼の髪の毛の束をつかむと手がストンと落ちていく。子供特有の透き通った声だ。ただ声を出しているだけなのに歌っているようで心を和ませる。

歌うか、フランス語でシャンテだったか。

車の名前でそんなのがあったなあ、なんて思いながら心の中では少女の名前は決定していた。

「くしゅんっ」

シャンテはくしゃみをして身体をぶるりと震わると、恭介に身体を寄せた。

だがそんな状態でも眠り続けるので、恭介はまた苦笑してしまう。そして彼はシャンテを包みこむように抱きかかえ、ゆっくりとマンションへ歩きだした。

名前（後書き）

シャンテの名前の付け方無理やりですいません。

初めての子育て

マンションに入るころにはもう完全に日は昇っており、森林都市に朝を告げている。

小鳥がうるさい位に鳴き、少しすると朝の合唱が始まった。

そんな朝、小鳥たちの声に交じって盛大な泣き声が一つのマンションからした。

当然その声はシャンテであり驚くのは、風呂から出たばかりのマンションの主だ。

マンションの主―夜神恭介は腰にタオルを巻いたままあわててシャンテを寝かしたソファに駆け寄る。

ソファとタオルケットが悲惨なことになっていた。

シャンテがおもらししてしまったようだ。

はぁ、と恭介はため息をつきシャンテが汚したタオルケットでソファ―を簡単に拭き、泣いているシャンテを右手で抱えタオルケットを左手で持ち風呂場に戻った。

途中洗濯機にタオルケットを入れ、スイッチを入れる。

風呂場で大きな桶を取り、その横のシャワー室に入った。

シャンテにシャワーをかけると彼女は気持ち良さそうに目を細める。その横で桶にお湯をためている。そしてシャンテをお湯のたまった桶に入れると、初めは驚いて身をこわばらせたが、次第に身体から力が抜けていく。

恭介は彼女の髪と身体を洗って泡を流すとタオルで髪と身体を拭きシャワー室から出た。

恭介は服を着て、シャンテにタオル巻きエントランスに戻った。

こつも埃つぽくては、教育上、衛生上あまりよろしくはない。

「よしつ」と一言気合いを入れ、マンション備え付けの掃除道具から箒とバケツと雑巾を取り出した。そして窓を開け、掃除をしなければならぬのでシャンテは一人掛け用のソファに置き掃除をはじめた。

一時間ほどできれいになったが、きれいになったのは一階だけで、まだ二階は行つてすらない。何となく部屋がある感じが、これは恭介の予想だ。

ふと静かなシャンテに目を向けるが彼女は右手の親指くわえながらただ天井をポーと眺めている。

なにが楽しいのか分からないが静かなのは大いにけっこうである。そろそろお腹も減つてきたので恭介はシャンテを抱き上げ、街にご飯を食べに行くことにした。

歩いて五分ほどの場所に駅があるのでそちらに向かい、バスに乗ろう・・・としたが諦めた。

朝の通勤ラッシュだ。ただでさえ小さい路線バスにこれでもかといふくらい人が押し詰められているのだ、子供と一緒になんて無理である。

恭介は今日何度目かのため息をこぼした。シャンテを一度抱えなおし仕方なく街まで歩いていく。

なんだか今日はやけにつかれる。もちろん体力的ではなく精神的にである。沈んでいるのが伝わったのか恭介の髪をシャンテが引っ張ってくる。下を向くとシャンテの心配げなまなざしが恭介の心をさらに抉った。

一昔前のRPG風に言うなら、

シャンテ は しんぱいげなまなざし を つかった
きょうすけ は 100 の ダメージ ！！

といった所だろうか。

彼はのろのろとした重い足取りで街に向かうのだった。

エルバの街は朝の市で賑わっている。

店主が声を張り上げ人を集め、そして集まった人がまた人を呼ぶ。
とても活気がある街だ。

そんな街の一角に視線を集める二人がいた。

その二人というのは恭介とシャンテであり、恭介はその様子苦笑し
シャンテは今だ恭介の髪をつかんでいる。

(どう見ても兄弟には見えないよな)

黒髪・黒目の青年が赤髪・赤目の子供を抱いているのだ。あまりに
異質すぎる。

まあ奥様方は別の視線を送っているのだが恭介は気付かない。

彼はシャンテを抱いたまま人の波を縫うように歩き、コーヒーの
おいに誘われるように喫茶店に入った。

コーヒーのにおいにお腹が鳴りそれを聞いた体格のいい男性は「こ
こに座んな」と笑いながらカウンターの席を勧めた。客は少く狭い
がシャレたいい店だ。

男性の横には優しそうな女性がいる。どちらも30代なのを見ると

たぶん夫婦なのだろうと恭介はあたりを付けた。

「モーニングとこの子が食えるものを頼む」

店主ら二人はあからさまに困った顔をしてシャンテを見た。

「その子いくつなの？」

女性がそう尋ねてきた。

「さあ、今朝うちに来たばかりだからなあ。」

恭介は顎に手を当て考える仕草をする。シャンテって何歳なんだろう？ 1・2歳だろうか。

「け、今朝来たって…。どういうこと？」

その問いに恭介は「まあ…来たというよりは捨てられた所を拾ったって感じか？」と曖昧に答えたが、深く聞くのは悪いと思ったのか女性はかわいそうに、とシャンテの方に手をのばし小さな頭を撫でた。シャンテは嬉しそうに笑い、女性もシャンテの様子に顔を綻ばせる。

「それよりも腹が減ったんだが…」

「お前さんのはいいんだが、嬢ちゃん多分ミルクしか飲めねえぞ。」

「そうなのか？」

恭介は驚いた顔をした。本当に何も知らないらしい。店主は呆れたように言った。

「まだ歯も生えてない赤ん坊に、ミルク以外のものが食べられるわけがないだろう」

それもそうか。恭介は納得したようだがそれからどうしていいかわからないように困った顔をしている。

すると女性が苦笑していった。

「私が買ってきてあげるわ。哺乳瓶だったら息子のが残ってるし。」

女性は手をさつと洗いタオルで拭き、エプロンを外すと出て行った。恭介は遅れながらも立ち上がり頭を下げた。

店主

女性が戻ってくるまで男店主とお互い自己紹介した。

彼はジョセフ・フリード。

元エルバの騎士団長でオールバックの茶色い髪に吊り上った濃い紫の目の偉丈夫だ。

だが、15年前さっきの女性―メアリー・フリードと出会い騎士団をやめて、この店をしているそうだ。

ついでに子供もいるそうだが今は学園都市にいるとのこと。

「じゃあお前さんずっと傭兵して旅してたのか？」

パンをかじりながら恭介はうなづく。

ジョセフの方はなるほど、と心の中で納得する。

（どんだけの修羅場を通ってきたかはわかんねえが、相当な場数を踏んでやがる。）

ジョセフの疑いの目にさらされても別段気にしていない風にしてる恭介だがものすごく気まずい状況だ。

何とか解消せねばと考えていると救いの女神様、もとい救いの火神様の方がこの気まずい状況に耐えられなかった様で「ふあゝん」と泣き出してしまった。

恭介はことさら慌てた様子で揺すってやりながらジョセフをジト目で見た。

ジョセフは視線を恭介から逸らし今しがた入ってきた客の注文を聞きに行くことで責任のがれをしている。

こうなると困るのは恭介だ。

ここには少ないとはいえ客がいるのだ、その人達からの視線が痛い。

だがジョセフまでも非難めいた目で見ているのは恭介には納得できない。

恭介も非難めいた目でみてみたが彼はどこ吹く風だ。

そして朝のような大合唱になりそうなとき、「ただいま」と間延びした声と紙袋のおとが店の奥から聞こえた。
女店主―メアリーが帰ってきたのだ。

両手には複数の紙袋を持っている。

メアリーはシャンテの声音におどろきつつも荷物をおろし微笑ながら、恭介の中のシャンテを抱き上げた。

そしてメアリーは彼女をゆっくりとゆりかごの様に揺するとシャンテはすぐに泣き止んでしまう。

不思議だ。やはり母性と言うやつなのか？

「ジョセフったらまた子供を泣かしたわね。シャンテちゃんちよおっと待っててねえ。今ご飯用意するからねえ。」

初めジョセフを見て可笑しそうに笑い、次いで指でシャンテの涙を拭いながら蕩けそうな顔でシャンテと共に奥へ消えていった。

見えなくなったのを確認した恭介は泣く子も黙る視線をジョセフに向ける。

彼は気まずそうにさっきのメモリーの発言について説明した。

曰く、彼の吊り目は子供にはとっても危険に見えるらしく目を合わせると怖いそうだ。

しかし、それだけでも笑えるのにそれを語ったのが息子だということから笑わずにはいられない。

下を向いて笑う恭介をジョセフは拗ねた様に、客に出すためのコーヒーを入れている。

こうして見ると結構可愛げあるのが不思議だ。目で台無しだが。

そんなジョセフを見ているとメモリーがシャンテを胸に抱きながら戻ってきた。

メモリーはシャンテを片手で器用に抱きながら、もう片方の手で哺乳瓶を支えている。

恭介はシャンテを見て驚いた。さきほどまでタオルを巻いたままだったがその下に青い衣装が見えているからだ。

「その服は…？」

「ん？ああ。さすがにタオルだけではかわいそうでしょう？お金の事は気にしないでいいわよ。お会計に足しておくから。」

…語尾にハートマークが見えるような気がするが気のせいではないだろう。

さすが商売人、ただではくれないようだ

。お金の事はきにしないでいい、と言ったが恭介にとってはかなり気にしなければいけない問題だった。

服におむつ、ミルク…今そんなに金を使ってしまつては後々困る。

「…少し待つてくれないか。」

「あら？それはまた来ていただけるってことかしら？」

恭介が絞り出すように言うと、メアリーは逆に跳ねるような調子で楽しそうに言った。

親切な優しい女性だと思っていたがよく考えてみればあのジョセフの妻だ。

ただの女性があんな強面のしかも隊長クラスの武芸者と付き合えるわけがない。

恭介はこの女性に頼ったことを少し後悔した。

店主（後書き）

ととろはメアリーさんが大好きです（笑）

メアリー

その時恭介の中にある思いがよぎった。

（この二人にシャンテを任せよう）

だが恭介が口に出そうとした時より一瞬早くメアリーが先に口を開いた。

「育ててあげたいけど、うちでは無理なのよねえ。ジヨセフもいるし、シャンテちゃんが許さないだろうし」

「シャンテが？」

「ええ。本当は欲しいんだけど、あなたにすっごく懐いてるし、ジヨセフもいるし。」

「おい。なんか俺に対して悪意を感じるんだが…」

メアリーの言葉を聞いたジヨセフが気まずそうに聞くと、メアリーは美しい笑みを浮かべていった。

「あらそう？それはごめんなさいね？」

…確かに謝ってはいるが否定はしない。

その様子にジョセフは若干涙目になっており、お客さんから同情のまなざしを向けられている。

ジョセフの大きな身体が心なしか小さく見え強面も少し可愛く見える。

今ならシャンテが見ても泣きだしたりはしなさそうだ。

この夫婦の力関係は妻の方が上の様である。

そんなやり取りをしている間にシャンテはミルクを飲み終えたようだ。

メアリーは縦に抱きなおすとシャンテの背中を優しくたたき、ゲップをさせた。

さすがになれた様子である。

すると満足したシャンテは周りを見まわし恭介を見つけると満面の笑みを浮かべ恭介に手を伸ばした。

メアリーは少し寂しげな表情を浮かべ「ほらね」と言うと恭介にシャンテを渡してくる。

さっきまでメアリーにとっても懐いていたので恭介は驚いた様子で受け取る。

お腹を満たしたこともあってかあー、うーとか機嫌良さにうたっている。

そんな様子に恭介は苦笑し、じゃあとシャンテを右手に抱え直し左

手の小銭を出して帰ろうとした。

「あら？どこに行く気？」

美しい笑みを浮かべたメアリーがジョセフに勘定を済ませた恭介に言った。

この人の笑みは美しいのだが…何か黒いものを感じる気がする。だが恭介は何を言っているのか分からないらしくジョセフに向かって首をかしげている。

「俺を恨むなよ坊主、悪いのは俺たちに頼ったお前の人生経験の無さが招き起こしたんだ。」

うんうんと腕を組んで頷いている。ジョセフはわかっているらしくなぜか仕方ないと言う風だ。

恭介はますますわからなくなったが、メアリーが懇切丁寧に教えてくれた。

「シャンテちゃんの服におむつにミルク…どうやって払うかちゃんと考えてくれないと困るわ？払うあてはあるの？」

恭介は「そんなもんまで買ったのか。」といったが、正直今はあてがない。

借りたものは返すのが道理である。仕事があれば払えるだろうが、いつ仕事ができるかわからない。

それにもらった金を使ってしまうえばやはり恭介には苦しいだろう。恭介が考え込んでいると大げさにため息をついてメアリーが言った。

「はあ、あてがないならしょうがないわね。」

もしかしてチャラにしてくれるのだろうか。
恭介は少しほっとしたような顔をした。

「うちで働かせてあげるわ。」

…期待した俺が馬鹿だった。

メアリーはあいかわらず美しい笑みを浮かべたままシャンテに手を伸ばした。

「そうすれば多少はお給料も出すし、私はシャンテちゃんに会えるし、それにあなたの容姿なら客受けもいいだろうしね。」

まさに一石二鳥!!とすぐく…いやものすごく嬉しそうに言った。
お金が欲しいというよりシャンテに会いたいというのが本音のよう
だ。

客受けがいいというのはまあ若いからだろう。
ここで拒否してもまた何かを言われ丸めこまれるのが落ちだ。

恭介はただ力無くうなずくしかなかった。

メアリー（後書き）

メアリーさんは書いてて楽しいです。

この人ほど動かしやすいキャラは今んとこいないです。

ただ欠点は勝手に動きすぎて暴走するところですかね（笑）

借金

翌日、恭介はいつも通り鍛錬をしてそろそろ起きるであろう夜泣き姫を見に行った。

幸いまだ起きていないようで静かだったが、昨夜はひどかった。

深夜二時を半分ほど過ぎたころだ。

急に泣き出した姫に恭介はメアリーに言われた通り、哺乳瓶でミルクをやったが、何がダメだったのか全然泣き止まない。

困った恭介は、そこからほとんど寝ずの番だった。

後で気付いたがおしめの締め付けが強すぎたようだ。

そんな事があり彼はすこぶる機嫌が悪いのだが、彼女が泣き出すと勝てないのがわかっているので足早にマンションに戻るのだった。

午前八時にシャンテと共に我が家であるマンションを出る。

外は肌寒く霧が出ていて顔などにへばりつくような感じた。

腕に温かさを感じ、シャンテを見ると右腕一本で持っている恭介の服に小さな体を寄せてきていた。

その様子に恭介は剣帯に左手を伸ばし「スケルトンチェーン」と短く言うとなりの周りに銀の鎖が復元された。

ディックの時のような大剣はなかった鎖だけが復元されている。ダイトの二つ目の復元状態だ。

二つに共通するのは鎖の先にある口を開けた血の様に赤い骸骨の分銅だけだ。

鎖は恭介たちを囲い、火が付いた。外力系衝剋が変化、化鍊剋である。

ただし、その炎は敵を殺す為でなく温めるためであるから、ほんのりと温かい炎だ。

シャンテは鎖を興味深そうに眺めてから恭介を見た。
どうやら恭介がしていると分かったようだ。

「これで寒くはないだろう？」

ぶつきらばうな言い方の恭介にシャンテは恭介の髪を引っ張った。
シャンテは恭介を心配げな眼差しで見ている。

恭介は苦い顔で視線をシャンテから前に変えた。

（こいつは狙ってやっているのか？）

そんなことを思いつつも、いまだ朝霧の濃いエルバを恭介は進んだ。

いくら霧が濃くとも人の喧騒までは隠せない。

今日も今日とて日は昇り、日は沈む。それと同じようにエルバの人々は時間に忠実に動きだし、朝の仕事に精を出している。

恭介たちにもその声が聞こえ恭介はダイトをしまい、シャンテを深く抱え込んだ。

シャンテも恭介の髪をギュッとつかんだ。

正直痛いのだが、また昨日の様な好奇の目のほうが痛いので、気にせず目的の喫茶店に向かうことにした。

しかし、街の人も昨日見たからかさほど驚かず「あゝあ、昨日もい

たなあ」ぐらいで恭介は助かった。

まあ、別の視線もあったが…。

昨日と同じように人ごみを縫うように歩きコーヒーのいい匂いのする喫茶店に入った。

入ってきた恭介たちを見た途端、女店主が嬉しそうによってきた。

視線は特にシャンテに向いていたが、恭介は昨夜のお守りで精神的に疲れていたのでありがたい。

恭介はメアリーにシャンテを任せカウンターの席に着いた。

周りには、昨日と同じ顔がいくつもあった。どうやらここの常連らしい。

そんなことを思っていると、恭介の前にコーヒーのいい香りがするカップが置かれた。

視線を上げるとジョセフが苦笑いしていた。どうしてこんなに愛嬌があるのだろうかこの男は…。

「すまねえな。昨日あいつに言ったんだがどうしても譲らなくてよ
お。」

なんだかんだ言ってもこの人は優しい様だ。

あいつとは間違いなくメアリーのことだろう。

まあ、初めから期待していなかったので落ち込まない。さしずめメアリーに二、三言いわれて負けたことは想像できた。

そのメアリーはシャンテとじゃれている。

こうして見ると聖母の様なものになあと心の中で思い、すぐさま否定した。

あれは、聖母の仮面をかぶった悪魔だ。それも性悪の。

「まあ、借りたものは返すのが筋だから働くが、いったいいくらなんだ？」

「さあなあ、あいつ財布をすっからかんにして帰ってきたから相当だと思うぞ。」

すっからかん！？恭介は少し青ざめた。

あの悪魔最初から払わせる気だったんだろうが、そんなに使う必要があるだろうか？いやないだろう。

…いやまだ最初からあまり財布にはお金が入ってなかったという可能性が残っている。その可能性にかけよう。

思考の海に沈んでいた恭介を引き上げたのはジョセフのポツリと言った言葉だった。

「まあ、いつも持ち歩くのは大体30000メルだからそれ位じゃないか？」

終わった。

この町に来たばかりで仕事もまだもらってない俺にそんな大金払えだなんて、本当に悪魔じゃないだろうか。

実際はそこまで大金ではないのだろうがお金が尽きてこの町にやってきた恭介にとってはかなりの大金である。

それに最初に市長から生活費として渡された金額が50000メルだ。払ってしまえば生活費の半分以上を使ってしまうことになる。

50000メルという大金をもらって有頂天になっていたわけなのだろうか？

（仕方ないのか…？）

計算されている様な気がして恭介は頭をふった。

考えたら負けなのだ。今は働くことだけを考えよう。

そう納得すると出されたコーヒーを飲みほし、ジョセフに向かってこういった。

「俺は何をすればいい？」

これが恭介の人生最大のミスだった。

借金（後書き）

お金の単位はねつ造しました。

公式で出てましたっけ？

すいませんもし出ていたなら教えていただけるとありがたいです。

r z

すぐ変えさせていただきます。

笑顔講座

恭介は今、笑顔の特訓をしている。
そして隣には… ジョセフがいる。

この二人の前には当然のごとくメアリーがいて、シャンテを抱っこしている。

「ほらキヨウちゃん顔が引きつって… あー！ シャンテちゃんが泣いちやう、ジョセフその顔ダメー！」

「だから、俺にやらせるな！！」

かれこれ10分くらい続いているメアリー主催の笑顔講座（客には帰ってもらった）だったが、この二人にはなかなかの難題の様だ。
恭介はただ引きつっているだけだが、ジョセフの笑顔はいつもの数割増しで怖い。

これだったらいつもの顔の方がいいのでは？ と思ったがさすがにジョセフが可哀想なので口に出すのはやめておいた。

「こらジョセフ、あなたが怒鳴ったからシャンテちゃん泣いちゃったじゃない」

この会話も何度聞いただろうか…
そしてシャンテは何度泣くのだろうか…。

結局シャンテのOKが出たのは、昼を過ぎたころだった。
まあ、許容範囲内だが。

かくゆう恭介は完璧な笑みを身に付け、メアリーは喜んでいた。

（これであの服を着せれば完璧ね）

メアリーは知らぬうちに笑みを零していたがそれを誰も見ていなかった。なので、気付いたものがない。
シャンテだけは見えた様でぶるっ、と身体を震わせた。

笑顔の特訓が終わり、カウンターに突っ伏しているとメアリーが楽しそうな声で恭介を呼んだ。

いやな予感がするところではない。
確実にいやなことが起こると断言できる。

正直行きたくなかったがここで逃げたところで何も変わらない。
恭介は重い腰を上げメアリーのもとへ向かった。

声は厨房の奥の方にあるドアの向こうから聞こえる。
ドアを開けると満面の笑みを浮かべたメアリーが出迎えた。
もちろんその手にはシャンテを抱いている。

…いやよく見るとその手にはシャンテだけでなく何か黒い布のようなものを持っている。

「ほらこれモカの従業員服、うちで働くならこれを着てね。いちおう正装だから。」

そして手渡すと再びシャンテと共に奥へと消えていった。

手渡された服を見つめジョセフはこんなものを着ていただろうかと思ったが、着ていた気がしたので一応着てみた。

着替え終わると「あらぴったり」とこれまたぴったりのタイミングでメアリーがドアをあけて厨房に入ってきた。

覗いていたのだろうか…。そう思ったが口には出さず、「これでいいのか」と不愛想に返した。

恭介が着ているのは明らかに高そうな執事服で、成長したら困りそうなほど完璧にサイズの合った服だ。

それを着心地悪そうに見下ろしている恭介だが、完璧に着こなしているのは気のせいなのだろうか？

「ちなみにそれも借金の中に入ってるからね」

「はあ！？それはおかしいだろ！！」

「何がかしら」

…駄目だ。この人に何を言っても聞かない。
恭介は頭が痛くなってきた。

だいたいこんなを買ってたらこの人たちの生活も苦しいだろう。
そんなにもうかるのか？喫茶店って…。

若干現実逃避をしているとジョセフが部屋に入ってきて、驚いたように恭介を見ていった。

「おお結構似合うじゃねえか。美男子の特権ってやつか？着る奴が着ると結構様になるもんだなあ。それ俺のせがれが「ジョセフ？」あつ、きゃ、客を待たせてるんだった。ち、ちよつとばかしいってくるわ。」

笑顔で話していたジョセフだったが、メアリーに名前を呼ばれた途端顔色を変え店の方へ戻ってしまった。
まだ店は開けてないはずなのだが…。

そんな事よりもさっきジョセフが言ったことが気になった。

「これはあなたたちの息子のものなのか？」

「何の話かしら？」

「いやさつき」さあそろそろお店開けなきゃね。恭ちゃんも準備して」

待ったをかけようとしたがメアリーは気にせず行ってしまう。
待ったの体勢のまましばらく動けず呆然としていた恭介だったが、
ため息を吐きあきらめたように動き出した。

恭介の仕事は店の前での客寄せだった。

ただ、練習した通りの手に入れたばかりの完璧な笑顔を振りまくだけの簡単な仕事だ。

しかし彼は正直、笑顔になっているかとても不安のようで練習した笑顔より少し硬い。

それが、アルバイト初体験の新米定員の初々しさに見えるようで保護欲にかられた奥様方を呼びこんでいる。

そんなことなど露とも知らぬ恭介は、必死に笑顔を作るのだった。

死のロード

バイトの生活も一週間ほど過ぎただろうか。

恭介は客寄せから、ウェイターの仕事になっていた。

もう自然と笑顔を作れるようになり、それにつれて女性客も増えていった。

ジョセフが人に見せられる程度には成長したことも女性客の増加を手伝っているようだ。

しかしその代り古株たちは開店直後の比較的すいている時間にしかこれなくなり少し不憫だ。

そんな忙しくも平和な毎日のことだった。

今日はいつもより人が少ない。

昼になると列ができていたのに今では古株たちだけとなっているのだ。

そんなことを恭介が思っていると、ジョセフは思い出したようにいった。

「おめえは知らなかったな。今エルバは3年に一度の死のロードに入ってた。」

「死のロード？」

恭介には聞きなれない言葉だった。

ジョセフは相槌を打ちながらなおも続ける。

「そう、汚染獣が大量にいるまさに死のロードだよ。毎年多くの武芸者がこの時期に死んでくんだ。」

ジョセフは苦虫をかみつぶしたような顔をした。

恭介は疑問に思った。

なぜそんな危険な道をこの都市はいかなければいけないのか。そもそも汚染獣を避けるための電子精霊であるのだ。そんなことをする理由がない。

ましてやここはグレンダンではないのだ。武芸のレベルも高くはないはず。

あまりにも無謀すぎるし、都市が進む意味がない。

いや、一つだけあったか。

「セルニウムの鉱山か…」

そう、都市が動くための原動力だ。

都市はそれを求めて彷徨い時に鉱山を求めて戦争だつてする。

それは生きていくために必要だが、果たしてそんなこと誰が決めたんだ。

レギオスの人たちは答えられないだろう、いや気付いてすらないのだ。

それが当たり前だから。恭介はこのような謎を知りたくて、いくつもの都市をまわっているのだ。

「ああ、電子精霊には余程魅力的なんだろうよ。だからお前のように強い傭兵をローエンは雇って武芸者の補充を定期的にしなけりやならんし、それだけ経費をさいてるんだ。客の少ないのもしょうがねえよ。」

「それでいつもより活気がないのか…。」

恭介は店の外を見ながらそうつぶやいた。

何か聞き覚えのある名前が聞こえたが恭介は、スルーしてしまった。

そうしてジョセフと和やかに話していると、のほほんとした声が店内に響いた。

「ただいま」

買い出しから帰ってきたメアリーの声である。

シャンテはメアリーの腕の中でうとうとしている。

「今日は、どこまで行ったのです？いつもより遅かったじゃないですか」

「この時期は近くの商店までしまっちゃててねえ、ちょっと遠くに行つてたの。あつ、そういえば大分執事言葉が板についてきたじゃない。」

「…仕事病ですよ。」

誰のせいでこうなつたと思つてゐるんだ。とでもいうような言い方だったがメアリーは一向に気にせず、買つてきたものをジョセフに渡した。

そしてシャンテのために哺乳瓶をだし、眠たげなシャンテにミルクを与えた。

2時を過ぎた頃、大通りは閑散とし多くの商店は商売を止める時間なのだが「モカ」は営業中の看板を下げない。

ジョセフ曰く「どうせ入らねえなら、ずっと開けといた方が得だ。」だそうだ。

それにしても古株たちはいつまでいるつもりなのだろうか。

そんな、昼下がりのことだつた。

さきほどまで嬉しそうにシャンテにミルクをやっていたメアリーが、一転してこわばつた顔になりジョセフを呼んだ。

その声にも若干の怯えがある。

「ジョセフ…来る…」

恭介が心配して駆け寄る前にジョセフが素早く小柄なメアリーのそばに立った。

彼は右手をこわばっているメアリーの背に手を置き、落ち着かせると冷静に言った。

「汚染獣が来た。」と。

エルバ騎士団（前書き）

遅くなってすいません。

今回はちょっと長めです。

…でも駄文です。すいません。

エルバ騎士団

恭介はいつたい何を言われたのか一瞬わからなかったが、汚染獣と言ふ単語に反応した。

「どうゆう事だ？なぜ警報が鳴っていないのにわかる。」

「…メアリーがこうなる時はいつも総じて汚染獣の警報が鳴る。」

メアリーが落ち着くのを待つて話し出した。

ジョセフの纏っている空気が変わった。

温度が一気に下がった感じである。

死線を潜り抜けていた者のみが纏うことのできる空気。

だが、こんなことで飲まれる恭介では無いし、飲まれている場合ではないのだ。

迷いは一瞬、すぐに答えを出した。

「あんたを信じるよ。じゃあ、シャンテを頼みます。」

一週間という短い間だったがこんなジョセフは見たことがない。メアリーだってそうだ。

こんなに怯えた表情をシャンテの前で見せる様な性格ではない。それに今は、デスロードに入った。

汚染獣が来てもおかしくはない。

それならば速く市長の所へ行つて対策について話し合うべきだ。

恭介の言葉にジョセフは任せろという風に頷き、メアリーはシャンを強く抱きかかえる事で返した。

恭介はそれだけ見ると「モ力」を出て行った。

「モ力」を出た恭介は剽で強化した跳躍力で屋根を飛ぶように渡り、一直線に市庁舎に向かった。
その途中に都市が方向を変えて、避難用アラームが鳴った。

「どうなってるんだ？都市よりも早くわかるなんて、ありえないだろうって普通。」

そう冗談めかして言った恭介だったが、内心ひどく動揺していたことに気付いて頭を振った。

メアリーの怯え方は尋常じゃなかった。

しかし、今はそんなことを考えている場合じゃないのだ。

動揺を隠すように恭介はさらに剽をまわして速度を上げ、市庁舎に急いだ。

ふと下を見ると多くの都民が一か所に向かっているのが見えた。
当然場所はシェルターであり、恭介が何としても守らなければならぬ場所である。

恭介はシエルターの大体の場所を確認して、それから一度も下を見なかった。

3分ほどで市庁舎に着いた。

遠くからでも見えるように、少しだけ高い位置に市庁舎は造られている。

都市の中心に建てられたそれは、中心の塔を基準に左右対称の少し低めの塔が立っていて、一番大きい塔の頂点には森海都市を表す旗があり、風によってはためいている。

市庁舎の前には庭があり、色とりどりの花が風に揺れていてとてもきれいだ。

ただ、庭は左右が非対称になっていて少し遊び心を感じる。なんだか、面白い事好きなこの都市を表しているようだ。

ツタが壁に張り付いているが、それも好き放題にのびている訳ではない。

ツタはしっかりと手入れが行き届いているらしく、白いお城の様な市庁舎がさらに際立って見える。

この手入れの良さを見るとこの都市の繁栄がうかがえる。

市庁舎はまさに都市の顔だ。

今恭介が向かっているのは、中心の一番高い塔、その最上階にある市長室だ。

恭介が面接を受けた場所でもある。

ローエンから50000メルを支給された時、有事の際はまずここ

へ来いと言われていたのだ。

実際問題として、一度ローエンにはランドローラーの許可の申請と、念威繰者を借りなければならない。

恭介は庭に入るとそのまま塔の側面を昇って行く。

そして、市長室の外にバルコニーがあったので、バルコニーと市長室をつなぐガラス戸を開けて中に入った。

数人の人の気配があるのでもう対策にあたっているのだろう。

「市長、すぐに出たいのだが汚染獣への案内役とランドローラーの許可が欲しい。」

恭介の登場に都市外用の戦闘着を着た武者たちと市長が驚いている。

しかし、その誰もが恭介の存在に気付けなかったところを見ると、あまりレベルは高くないだろう。

その証拠に突然不審人物が現れたにも関わらず誰もダイトに手が伸びていない。

もし、この非常事態に市長に何かあったら、大変なことになるくらい予想できるだろうに…。

恭介がため息を吐いた。

風の噂に『今年の騎士団は歴代最弱だ』とは聞いていたがここまでとは知らなかった。

そんな風に見ていると、驚きから帰ってきた彼らがダイトを復元させた。

ただ、人に向けたのは初めてなのだろう。剣先や銃口が震えている。

「ダイトを出すまで5秒は長すぎる。そして今ダイトを振り回せば確実に市長が死ぬ。」

独り言のように呟いた恭介の声には、完全にあきれが混じっている。

「君の方こそノックもせんが入ってくる方も悪いと思うがな。」

ローエンは恭介を見るとエルバの騎士団と思われる武者たちに武器を降ろすように言つと、こちらにも呆れたような声で言ってきた。

「ふつう気付いていると思うだろ、別に殺戮をして入ったわけじゃないんだから」

恭介は地で喋っていることにも気づかずにローエンに言っていた。ローエンは彼の年相応のしゃべり方を聞いたことがなかったので驚いたが、なんだかうれしく思った。

「まあ、そのことは置いて。恭介君、彼らも連れて行ってくれないだろうか？」

「なぜ、俺に聞くんです？...と言つか付いてくるんですよ。」

恭介は付いて来るとは思っていたので異存はないが、自分に確認される覚えはなかった。

しかし、ローエンからの返答は恭介を大いに困らせた。

「君が彼らを鍛えてやってくれないか？見ての通りの様だが、彼らはまだ花の実にもなっておらん。しかし、いずれはエルバを背負って守るようになる。そうなれるように君に手助けをしてもらいたいのだ。」

ローエンは本気でこの都市が好きなのだろう。

そして、このおおらかで楽しいこと好きの都民も…。

恭介だってこの都市は嫌いじゃないし、守りたいと思っている。

ただ、彼は自分にそんな事ができるなんて思っていない。

恭介は前から一匹オオカミのように一人でも片付けてきた。そんな人間が人にものを教えるなんてこと、それも一人ではなく複数の人間になんて無理だと思っているのだ。

「・・・時間をくれませんか。もちろん今回の同行は許可します。ですが、確実に守るとは言い切れません。」

「いや、それで十分だ。彼らには本物の戦場を見せてやりたいのだ。自分の身くらい自分で守らねばならん。」

武者たちに動揺が走って、「聞いてない！」「守ってくれるんじゃないのか！」など口々に弱音が聞こえてきた。

この街を守る騎士団にはあまりに情けないセリフである。

だが、彼らの中で一番若い紫の髪に青い目をした少年が恭介の方へ来て、頭を下げてきた。

驚いたのは恭介である。

隣にいるローエンも驚いていたが、感心したように顎の髭を撫でた。少年はひどく震えていたがしつかりとした声で「よろしく願います。」と言った。

驚いている恭介をよそに、今はどうするか決めきれないで、弱音を吐いている彼らに向き直って叫ぶように言った。

「来たくない奴は帰れ！！僕は強くなってみんなを守る！！」

怖いだろうに彼は気丈にも帰れと言つてのけたのだ。

それがどれだけの覚悟と勇気があるのか恭介は知っている。

だから、恭介は市長からランドローラーの置いてある場所と念威操者のことを頼み、少年を肩に担いで都市の最下部に向かった。

彼は子供じゃない！と怒って暴れているが気にせずエレベーターで下へ降りて行った。

キーダ

エレベーターの中、おとなしくなった少年・キーダ・クローヴィスに恭介は話しかけた。

「どうして俺に頭なんて下げたんだ？俺でなくてももっと他の人でも良かったんじゃないか？」

恭介がそんな疑問の言葉を口にした。

キーダは少し考え込んでから恭介の目を見てその疑問に答えてくれた。

「あんたなら現実を見してくれそうだったから。先生たちは、武芸は教えても現実は見してくれない。だから、それを知るために騎士団に入ったんだ。もちろんさっき言ったこともほんとうだよ。」

「現実…か。」

恭介は、苦笑してしまった。
まるで青かった昔の自分ではないか。

しかし、キーダは馬鹿にされていると思ったのか、弱まっていた腕の拘束から抜け出して、恭介をにらんできた。

ただ、恭介の方が頭一つ分大きいので見上げる形でだ。

恭介は少年の反応が楽しくて仕方なかった。
こうやって睨まれても、怖さと言うよりも可愛さが増しただけの様に思えるのが不思議だ。

動物で例えるなら、確実に小動物だな、と恭介が思ってしまうほどの可愛さだ。

おおよそ戦闘前に考える事ではないことを考えてしまったので、今だ睨んでいる彼に適当な謝罪を返した

チーン、とてもレトロな音によって、恭介たちのエレベーターがエルバの最下部に着いたことを知らせた。

キーダはだいぶ慣れたエレベーター独特の浮遊感がなくなり、重力がかかったことで膝に力が籠ってしまふ。

よろけなかった事に安心したような彼は、恭介が見ていたことに気付きすぐに平然をよそおう。

恭介はキーダの反応が楽しくて仕方なかったが、すぐに気を引き締め、エレベーターからおりた。

「案内を頼む。」

薄暗く静かな最下部では普通の声でも大きく聞こえた。

ここに居るのは2人だけだと思っていたキーダは不思議そうだったが、すぐに声は返ってきた。

「…いつから気付いていたんですか？」

抑揚のない平淡で機械的な少女の様な声が恭介たちの頭上からした。キーダは驚いて上を向くと、桃色のきれいな光を放つ花卉のような形の物が浮いていた。

念威操者が使うパールダイトだ。

「汚染獣の数と形態、距離を教える。」

恭介は念威操者の質問に答えず、事務的に返した。恭介は基本的にかかわれるのが大嫌いなのだ。

「約20キロメル。成体が12、そのうちの1匹は雌性体です。」

その念威操者の声に若干の怒りが感じられて、キーダは恭介を責めるように見たが、

「めずらしいな、雌性体が生きているなんて…。」

恭介は念威操者の言葉を聞いて難しい顔をしていて聞いていなかった。

雌性体はほとんどの場合一人では栄養の取れない幼生体たちに自分

の体を食べさせるのだ。

そして、おなかのすいている幼生体たちも餌を求めて母を食らう。だから、母体が残るはずがないのだ。

例外は都市が襲われて人が食われることだが、それはないだろうと恭介は考えている。

都市が襲われたならばもつと成体の数が多くなるし、何らかの残骸などが残っているはずだからだ。

そして、一番の理由がここはエルバの縄張りで、都市戦はまだ先なのでこの近辺には都市はないはずだからだ。

では、なぜ雌性体が…

その時、キーダのあつと言う声と共に、恭介の頭に強烈な痛みと衝撃が走った。

恭介の長身が災いしたのだ。最下部には大量の配管がはりめぐらされていて、そして前方不注意気味だった恭介は迫りくる配管に気付けなかったのだ。

痛みに思わずうずくまってしまふ恭介に、先ほど無視された念威操者は馬鹿にするように笑い、キーダも声を上げて笑っている。

静かだった最下部がキーダの笑い声の反響によってとてもうるさくなった。

殴って止まらせたいところだが、彼の緊張が和らぐことはいいことだ。

そう自分を納得させた恭介は念威端子を睨みつけてから黙って立ち上がり、歩き出した。

雌性体のことなんて忘れたまま…。

キーダ（後書き）

なんか萌に飢えてたみたいですこの時…。

シャンテがいなくなっちゃったもんでつい…

後悔は死ぬほどしてるよ（いつそ死ね）

メリル

恭介たちは目的地に着いた。

そこには、サイドカータイプのランドローラーと一人乗りのものが、三台ずつきれいに並べてあった。

恭介はそのロッカーにあった遮断スーツを取り出し、適当なサイズの戦闘着と共に着替えた。

少し大きめだったが動かしにくいということはなかったので良しとする。

恭介は各関節の動き具合を確認を入念にすると、長い髪を戦闘着の中に入れた。

そこまですると市長と騎士たちがやってきた。

若干人数が減っているが仕方ない事だろう。

市長を認めたキーダは姿勢を正し、恭介は拳を広げたり、握ったりしながら頭だけ向けている。

市長はキーダに楽しなさい、と言うと恭介の方を見た。

「場所はメリルから聞いているね？」

メリルとは先ほどの念威操者のことだろう。

まだ、恭介たちの近くにいるが念威を切っているのか正確な位置まではわからない。

「ああ、今20キロメルの所だそうだな。仲間を呼ばれたら厄介だ。早急に対処したい。人数は欲しいが、腑抜けは邪魔だ、帰れ。」

恭介はあえてきつい言葉を選んだ。

戦場で死ぬのは生への執着を無くした者達だ。

汚染獣の強烈な殺気を浴びたとき、ほとんどの者はまず死ぬことを考えてしまう。

人間は未知なる物に恐怖を抱く。

それは仕方ない事だ。

しかし汚染獣の殺気を浴びる極限状態の中、絶望という闇に耐えられるだけの光があるかどうか…そこが生きるか死ぬかの分かれ目である。

だから、恭介はあえて厳しく言ったのだ。

始め迷っていたが皆一斉にフェイススコープをかぶった。

「ああ、これだけは言っておく。」

恭介はここで言葉を切り、周りを見回し、にやりと笑ってこう言った。

「簡単に死ぬると思うなよ。」と。

恭介はフェイススコープではなく頭全体を包帯でぐるぐると巻いて後頭部で余った部分を結び、保護ゴーグルをつけた。

彼はあまりフェイススコープを好まない。

恭介には見えすぎるのだ。

それだけで別に他意は無かったのだが、なぜかローエンに睨まれた。

「なんですか、ローエンさん？」

「…うちの娘では不満かね？」

「え〜と、別にそうゆう訳ではないのですが…。て言うか、誰が娘さんなんですか？」

そうローエンに確認するとローエンよりもさらに後ろから声がした。しかも聞き覚えのある少女の声である。

ただ、念威端子の時のような感情のこもらない声でなく、若干の怒りを感じる声だ。

「私のことよ、キョウスケ ヤガミ。さっきはよくも無視してくれたわね。」

恭介は少女の方に向き直るとローエンの娘と言っのを納得した。

金髪だが、目はローエンと同じで空を思わせるほどの澄んだ目をし

ている。

背はキーダより低い位で、顔は小さく可愛らしい顔である。
着ているフリルのワンピースがとてもお似合いだ。

その容姿に周りの視線が一気に集まる。

確かにいい念威を持っているし、念威操者にしては妙に感情豊かそうだ。

大分性格に難がありそうだが。

「子供の遊びに付き合っているほど暇で無いんでね。それに、こんなところに来ていいのかな？ メリル・シュバルツ？」

「こ、子供…！ わつわたしはもう14歳よ…！」

「そうだ、この子を馬鹿にすると私が許さんぞ。」

14も驚きだがなぜローエンが出てくるのだ？とは思ったがここは逃げるに限る。

こうゆう時の恭介の感はメアリーによってだいぶ鍛えられている。
そして今は最上級にやばいと告げているのだ。

恭介は浮いていた念威端子の一つを引っ掴み、逆の手でキーダをサイドカーに投げ込むと、エンジンをかけた。

メリルや周りの者たちは恭介の行動と大きなエンジン音に驚いている。

キーダが何か叫んでいるが気にしない。

恭介は運転席に座りそのまま、出口の所まで走っていった。

僕らの世界

しばらく何か言っていたキーダだったが、何も答えない恭介に苛立ちながらも仕方なく黙った。

恭介はそばにあったスイッチを押すと、まず後ろの通路がシャッターにより閉じられ、次いで前の扉が上から外に倒れるようにゆっくりと開いていった。

キーダは息をのんだ。

見渡す限りの荒廃した大地。感じるのは風に巻き上げられ、ヘルメット越しに感じられる細かな砂。

そこに音はない。

ただ、エンジンの音と都市が踏み砕く土の乾いた音だけだ。

「…ひどい。」

キーダはそれ以上何も言えなかった。

だが、それが一番彼の感想にあっている。

彼がエルバの人間だからこそ思う。

絶望なんて生易しい。

これはひどすぎだ。

都市内には喧噪が満ちていた。

エルバでは外縁部に行こうとすると必ず森を抜けなければならない。森の先には汚染獣の反応がないか調べるため念威操者や特殊な機械が置いてある。

だから、いつもエアフィールドの近くまで来ると見つかってしまい、

少しも外を見る事が出来ないのだ。

だが今は違う。外に出て、風を感じ、見ているのだ。彼がどのような場所に生まれたかを。

そして、知った。そこはまさに『無の境地』だった。

音はなく、熱もなく、ただ現実だけを見せるだけ。

まるで、何もかもを吸い込むブラックホールのようなのだ。

吸い尽くして残るのは結果の『無』と言う現実だけ。

ともすれば、人を恐怖に叩き落とすだけの危険をはらんでいる。ここに残るか死ぬかと聞かれれば間違いなく自分は死を選ぶ。それだけの恐怖をこの世界は持っている。

キーダたちが乗っているランドローラーはいつの間にか発進していた。

振動さえもリアリティがなかったが、恭介の言葉だけは違った。

「怖い、キーダ。だが、その気持ちを忘れてしまったら消されるぞ。この世界の支配者は向こう（汚染獣）だ。ホームでの戦いとアウェーでの戦いなんだ。両者が勝つのに重要なのは何だと思う？」

息をするのも忘れて見入ってしまったキーダは、深く息を吐き深呼吸するとゆっくりと考えた。

こんな状況でも冷静になれる自分に驚いていたキーダだったが、思考の海に沈んで行く。

いつも皆からはお前は亀か？なんて聞かれるが、冷静に考えることは大切である。

そして、ゆつくりと答えを口にする。

「ホームの場合は自分たちの土地を最大限利用して、アウエーの場合は慎重かつ素早く突貫しなくちゃいけない。」

「まあ、正解だ。今回俺たちはアウエーだ。緊張感と冷静さを失えば、一瞬で死ぬ。だからこそ、恐怖は重要なんだ。わかるか？」

「はい。」

ずっと前だけを見ていた恭介だったが、最後の一言だけはキーダの方を見た。

そして、キーダがうなずくを見るとすぐに前を向いてしまった。念威操者からは後一時間くらいで着くとの報告があり、キーダの顔は引き締まった。

ランドローラーが止まった。目的地に着いたからだ。

周りには先ほどの騎士たちがいて、皆が皆緊張しているのが張り詰める空気で分かった。

ここは汚染獣たちからは見えない大きな岩の裏。

覗けばさまざまな形の汚染獣が見えるし、走ればすぐの距離だ。

汚染獣は共食いで生き残るために色々な形になる。

そして、生き残るのは2〜3体ほどだ。

効率が悪いが確実に増える方法だ。おそろしいほどの生存本能である。

しかし、今は休戦中のように何もしていないで、ただじっとしている。

都市の存在には気付いていない様子だが、いずれ気付く。

恭介たちがここに居る事だっすぐに気が付くだろう。

相手は腹ペコの猛獣なのだ。

その近くにいい栄養源があるならば、それを食らうために必死になって来る。

それ故に攻撃が単純になり隙も多いから、初めての相手としては恵まれている。

恭介は騎士たちを集めこう言った。

「危ないと思ったなら絶対逃げろ。深追いはするな。そして、命令には必ず従え、いいな。」

恭介は言うど、騎士たちはダイトを復元させることで答えた。

「俺が7、お前らが5だ。突貫の合図は俺が出す。戦いの方はお前たちが主体となってやるんだ。」

恭介が最終確認をすると、騎士たちの高まっていた緊張感が最高潮に達した。

念威操者たちもこの空気に飲まれ、時が止まったような静けさがあ

なりに満ちた。

しかし、恭介は気にせず汚染獣の動きを見極めることに専念する。ここでミスを犯せば取り返しのない事になる。

静寂が包んでいたその時、汚染獣の一体の体がかすかに動いたのを見逃さなかった。

恭介の剄が爆発するように膨れ上がり、キータや騎士団も遅れながらに溜めていた剄を解放した。

しかし、もうそこには恭介の姿はなく、あったのは遠くに見える群青色の閃光だけだった。

案外気付くのが早かったなあ。

そんなことを思いながら、恭介は60メートルほどの距離を5歩で詰めた。

汚染獣の方は初動までに時間かかるため動けてすらない。

だが、動いていないときは殻が非常に硬く切ることが難しい。

だから、恭介は汚染獣が動く寸前まで待っていたのだ。

恭介はまず一番手前の汚染獣に狙いを定めた。

そして相手の間合いに入る直前、恭介は汚染獣の視界から、消えた。外力系衝剄の火鍊剄が変化 村雨

爆発的な剄を見せたと同時に切り離し、頸の幻影を作る。そして殺剄をかけて己の姿を消す難度の高い技だ。

汚染獣は向かってくる強力な剄の存在に気配を消した本体を見失ってしまう。

目標を失った汚染獣に突然左右からの痛みが襲う。

恭介が二つの骸骨たちを汚染獣の死角から噛みつかせたのだ。

「■■■——■■■！！」

汚染獣は痛みからか怒りからか、声にもならない声で天へ吠えた。そこに恭介はいた。

二対の漆黒の大剣は頭上で腹を重ねるように持ち、それにつながる銀の鎖は二本とも汚染獣につながっている

恭介は鎖を引っ張って距離を詰め、縦に回転しながら一閃した。

上手く着地した恭介は骸骨を汚染獣から外す。

すると、汚染獣は三枚に卸した魚の様に裂かれていて、支えを失ったことによりずれるように別れていった。

恭介は汚染獣の体液にあたらないようにしながら、次の標的に向かった。

苦戦（前書き）

遅くなりました。

苦戦

キーダは自分の目を疑った。成体を一瞬で絶命させたのだ。自分はただの一撃すらくらわせていないのに…。

キーダは恭介が怖かった。

キーダだけでなく騎士団全員も恐怖を感じているようだが、キーダの感じるものではない。

ただ、強大な力に対する畏怖の念だ。

キーダが感じたのは恭介の表面上の恐怖ではなくもつと内面的な恐怖。慈悲の無さである。

例え相手が人だった時もこうやってためらいなく殺していたのだろうか…。

だが、キーダはすぐにその考えを打ち消した。

恭介のおかげで騎士団の士気はかなり上がったのだ。

強大な力に目の当たりにしたことで自分が生き残れる希望の光が見えたためだ。

恭介はそれを狙ってやったのだろう。

キーダは他のことは何も考えず汚染獣に視線を向けた。

そこには今だ弱ってもいない汚染獣と苦戦している騎士団が見える。

キーダは静かに目を閉じ自分のパルチザン型のエメラルドタイプ碧石鍊金鋼を持つ手に力を籠めた。

そして、一度大きく息を吸い込むと剽と共に鋭く吐き出し汚染獣に向かって走り出した。

騎士団の戦っている汚染獣は多くの傷は負っているものの、致命傷には程遠い。

それは、ひとえに武芸者の質の低さを物語っている。

ただ、武芸者の質と言うのは技量や剋量だけでなく、判断力や強いメンタルだ。

最善の方法を念威操者からの情報で判断し、近づいてその一撃を確実に決められるある種の勝負強さである。

それを伴わなければ、いくら対人で強いと言われる武芸者でも浅く効果の薄い攻撃ばかりになってしまうのだ。

キーダは騎士団の動きに若干の鈍さが出ていることに気が付いた。

作戦では半数が汚染獣をかく乱し、もう半分が重い一撃を入れると言う作戦なのだが、全く進まない現状に焦りが出ているようだ。

「向こうは順調のようね。」

「そうだね。どこが柔らかい？」

フェイススコープ内からメリルの声が聞こえた。

しかし、キーダは驚きもせず、短くそう尋ねた。

汚染獣の間合いにもう入っているからだ。

その汚染獣は巨大な口に大量の生えた牙を吹き矢の様に飛ばし、けたたましい声を上げている。

向こうもなかなか当たらない攻撃に頭に来ているのだろう。

そう考えながらキーダは疾走する。

「眉間よ。それ以外な…っ伏せて。」

感情の籠らない声だったが、焦りは伝わった。

キーダは勢いのまま飛び込むように伏せると、すぐ上を大きな風を切る轟音が通りすぎて行った。

牙だけに注意していたキーダは汚染獣のしっぽの存在を見落としていたのだ。

（気付けなかったら死んでいたな。）

と、自分の命なのに何故かキーダは客観的に感じていた。

「眉間ですね。」

そう言うときーダは再び汚染獣に向かっていく。

キーダは何時になく冷静だった。

弱点はわかつているのだから、そこに自分の最大限の一撃を当てれば自分の勝ちなのだ。

この不利な条件がキーダの一撃で変わるかも知れない。

「お礼もなしですか…。」

そうは言ったもののメリルは自分が笑っていることに気が付いて驚

いた。

どうして笑っていたのだろうか？

そう思ったが再び無茶をしようとしている件の少年のサポートを再開した。

混戦（前書き）

本当に遅くなってすいませんorz

混戦

（正面からは牙のせいで無理だ。じゃあ後ろに回る？それも無理。
…上からの一撃。それしかない！）

丁度恭介が見本のようにきれいな一閃を見たばかりだ。
恭介のような陽動の技なんてあいにくと持ち合わせていない。

キーダにできる事、それは何も考えず一撃だけ与えること。

そして、キーダは恭介のように一人ではなく多くの仲間たちがいるのだ。

引きつけ役は向こうに任せよう。

キーダは汚染獣に向かって走っている。

何度も牙が飛んできたがメリルのナビによって避けたり、ダイトで弾き少しずつ距離を詰めている。

そして、何発目の発射だろうか。

一瞬牙の矢がなくなり再び吐き出す間のインターバルを利用し、一気に汚染獣の頭上へ飛び上がった。

キーダが持つ紫色の剣が彼を包み込み、一本の光線のように汚染獣へと駆け上がっていく。

そして、今だ騎士団と戦っている汚染獣の眉間を槍先で狙い、身体を捻って一気に降下した。

「えっ？」

そんな気の抜けた声がキーダの口からもれた。
勝ったとキーダは思った。
だが、甘かった。

汚染獣はキーダに気付いて上を向き口を開けた。
多くの牙は今にも発射せんとわなないており、口を開けた汚染獣の表情は笑っているように見えた。
キーダは死を覚悟し、目を瞑った。

だが、きたのは身を割かれるような痛みではなく、逆に硬いものを突き刺した手の感覚だった。

恐る恐る目を開けたキーダにまず分かったのは、パルチザンの刃が深々と刺さっている状態。

そして、自分が汚染獣の頭に片膝をつき、刺さっているダイトを両手で握りしめていることだった。

一瞬の静寂の後、動かなくなった汚染獣の頭部から緑色の体液を吹き出しキーダの全身にあたる。

自分とは違う温かみを感じてやっとキーダはダイトを握る手を緩めた。

「生きてるんだ…。」

最初は他人事のようにだったことをこの瞬間初めてキーダは実感した。
恐怖で出た涙のせいでとても視界が悪いが人影が見えたのでそちらを見ると、騎士団の皆がキーダのそばに立っていた。

「全く無茶しやがる。メリルちゃんや俺がいなかったら死んでたぞ、お前。」

そう言つて手を貸してくれる。

キーダもその手を取った。それより…

「…誰です？」

「おまつ、お前ガチで言つてんのか！？と言つか先に謝るとか感謝するとかあるだろ普通！」

「冗談ですよ。えーつと隊長？」

「お前…本当は名前覚えてないだろ。…グレイブだ。」

涙ににじんで隊長かどうかもあやふやだったが、どうやら当たつていたようだ。

キーダはいつものやり取りが無性にうれしかったし、楽しかった。

だが、助けてもらつた事への感謝は言わなければならない。

キーダは取りあはず隊長に頭を下げると、メリルに「ありがとうございます。助かりました。」とヘルメット内でハニカミながら言った。

メルルは無謀な突貫に怒っていたが、ハニカミながら言われると怒鳴る気持ちどこかに行ってしまった、はあとため息を吐いた。

「どういたしまして。」

本当にどうしようもない人ですね。

そう言いたかったが言った所で何も変わらない。

頭痛を感じながらも、取りあえず「次は気を付けて下さい。」とだけ釘を刺しておいた。

猪突猛進

無謀だ。

メルルはキードが汚染獣に向かう間ずっとそう思っていた。

人間は遮断スーツが破れると汚染物質に肌を焼かれ、そして、そこから侵入した汚染物質は患部を壊死させる。

だから、都市外戦では死ぬか無傷で帰ってくるか、と言う無理に近い状況で戦わなければならない。

しかし、キードは飛んでくる牙に怯むことなく汚染獣向かっている。今だ死傷者は出ていないが、下手をすると怪我人第一号がキードになってしまう。

さっきだって汚染獣のしつぽで危うく死にかけているのだ。

もう一度作戦を練ればいいのか？そうは思ってもメルルにはキードを止めさせるほどの良い案が無かった。

考えながらも三つ同時に来た牙の最善の避け方を教える。

メルルは頭をフル活動させ思考する。

だが、キードはメルルの苦悩なんて露知らず我武者羅に汚染獣に突貫していく。

（なんだか、悩んでいるのが馬鹿らしくなってきたわ。）

なんで自分がこんなに悩まなければならないのだ？そう思ってメルルは決めた。

「乗りかかった船よ、最後まで付き合ってあげる。」

そう念威端子を通して言ったが、キーダは必死に牙を避けていたの
で聞いてはいなかった。

そこからのメリルの行動は早かった。

近くに忍ばせてあった念威端子を部隊長の所に回しキーダのサポー
トを頼み、他の人たちにも話を通した。

騎士団の皆はチャンスが来るその時まで必死で攪乱を続けメリルか
らの合図を待つ。

キーダが一気に空に駆け上がる。

それと同時にメリルが攻撃の合図を出した。

騎士団が一斉に汚染獣に攻撃を仕掛ける。

汚染獣はキーダを迎撃の体勢で待ち、キーダは勢いのままに汚染獣
の頭部に落ちていく。

騎士団の攻撃に一瞬汚染獣の頭が揺らぎ、その上にキーダが落ちて
いく。

舞い上がった砂煙がキーダの姿を隠し見えなくする。

長い静寂。

念威操者たちは一つだけ生命反応がある事がわかった。

ただ、それがキーダなのかは汚染獣なのか分からない。

ゆっくりと舞い上がっていた砂が重力に従って落ちていく。

騎士団はもしもの場合に備え戦えるよう剄を高め、固唾を飲んで見
守る。

メリルたち念威操者も祈る気持ちで見つめた。

頬を撫でるような弱い風が吹く。

それはじれったかったが、確実に砂煙を晴らしていく。

メルルは一瞬、砂煙の隙間から汚染獣とは別の影のようなものを見た。

メルルが息を飲む。

そして、再びそれが見えた時メルルは大きな声で叫んだ。

「生きてる！！」

それは喜びに満ち溢れたものだった。

メルルの声を聞いた騎士団は歓喜の雄叫び上げ、念威操者たちは知らず握りしめていたダイトから力を張りつめていた息とともに抜いた。

雨降って地固まる(前書き)

あけましておめでとついでにしました
↑

雨降って地固まる

歓喜の声は恭介にも聞こえた。

始め急に切れた念威端子に驚いたが、事情を聞いて納得した。

（やっぱり無茶したか。まあ、小隊としては最悪の行動だが、結果オーライだな。）

恭介にはキーダの気持ちがよく分かった。

恭介も実際やってしまった経験で、若者特有の流行り病のようなものだ。

力はあるが認めてもらえない時、一番最初にするのが手っ取り早い力の見せつけだ。

大きな成果を上げて自分の有能性を相手に認めてもらう。

それは危険だが早く認めてもらえるだろう。

しかし、うまく行かない事が多い。

この時ポテンシャルは上がるが、それ故に空回りしてしまう。

思考より先に体が動いてしまうため攻撃の方法が単調になってしまふのだ。

そうなってしまうてはいずれ汚染獣と同じ『本能』で戦ってしまう。

それでは人間は勝てない。

生存本能で勝る彼らに人間が勝てるはずがないのだ。

そして、外界は汚染獣のホームであって、人間の生きる世界ではないのだから。

向こうと同じ状態ならば、アウエーである人間に勝ち目はない。

人間が勝つには常に自分の優位な状況で戦わなければならない。

それがこの世界^{レギオス}に存在する人間に与えられた、唯一のルールなのだ。

今回のキードはメリルが居たので助かったが、居なければまず助からなかっただろう。

（これを機に止めてくれればいいが…。）

チラリとキードの方を盗み見ると小さく騎士団の皆に小突かれているのが見えた。

次は周りがそうはさせないだろう。とまた苦笑した。

だが、その表情も直ぐに引き締まる。

恭介は彼らが戦っている間に7体きっちり殺したが、それでもまだ4体残っている。

その汚染獣たちが気づき始めたのだ。

ここよりも多くの人間の香りがする場所、森海都市エルバに…。

恭介は飛び立とうとしている一体を骸骨の分銅を投げて叩き落とした。

（殺すのは簡単だが、それではあいつらの為にならない…どうするべきか…。）

そう思いながらもう片方の分銅を汚染獣の羽の根元にぶつけ吹き飛ばす。

汚染獣が怒りの咆哮を上げ、辺り一面の空気を震わせると、その声に呼応するかのように他の汚染獣たちも咆哮した。地響きの如きその雄叫びは耳をふさがなければ聞いていられない程のものだ。

恭介も例外ではないのだが彼は珍しく巻いた包帯の下で驚愕の表情をしている。

彼自身文献などで読んだことがあったが実際に見たのは初めてだった。

いつもは単体でしか行動しない汚染獣が同族なかまを呼ぶ叫び。

「ちっ」

恭介はスケルトンチェーンに変形させたダイトをドーム状に張り巡らす。

幾重にも重なりあう鎖は大きく耳障りな金属音を立ててあたりの音を支配する。

これでこれ以上喚こうが仲間はない。

恭介は大きく跳躍するとドームの上に立ち念威端子を手を取った。

汚染獣は完全に隔離した。

これでエルバに被害が及ぶことはない筈だ。

「喜び合うのは後にして、さっさと汚染獣を倒せ。」

ぶっきらぼうにそう言うと、すぐに念威端子を切った。

本能の覚醒（前書き）

夜のテンションに感謝！！

本能の覚醒

喜びを噛みしめていたグレイブ達だったが突然汚染獣たちが競うように吠えだした事であわてて耳を塞いだ。

といってもヘルメットを被っている為気休めにもなっていないが。

グレイブは近くにいたキード達と同じく前かがみになり耳を塞ぐように強くヘルメットを押さええている。

「うつ…何なんだ…これは。」

グレイブが呻くような声で念威端子に話しかけた。

「これは…仲間を呼んでいるのでしょうか？」

念威端子から返って来たのは歳を感じさせる、しかし品のある女性の声だった。

この女性―シルビアは隊長専属の念威操者で最も功績を挙げた者に与えられる称号―ノーヴァを持つ一人である。

「っ近くに仲間は…！」

「その心配はありません。」

グレイブが汚染獣に負けないほど大きな声で叫ぶとシルビアは即答しきっぱりと言い切った。

あまりの即答に言い返そうとしたグレイブは次のシルビアの声に二の句は言えなかった。

「隊長がそんな怯えていては士気に関わります。それに私が調べましたから大丈夫です。」

始めは咎めるように次は安心させる声色で言う彼女の言葉にグレイブは言いかけた言葉を飲み込みゆっくりと目を閉じ直ぐに開ける。

そして、近くにいるキードに手だけで「敵に警戒せよ」の指示を出すキードもそれに頷き指示を飛ばしていく。

皆に伝わったのを確認すると自分に喝を入れ自らを奮い立たせる。

突然、鼓膜を破るような咆哮が耳障りな金属音に変わった。

騎士団に緊張が走り音源を見上げ皆驚きに目を見開いた。

そこにはグレイブ達を外界から拒絶するように覆うドーム状の見覚えある銀の鎖。

それは重なり合った影になり闇を広がらせる。

新月の夜のようになったドーム内で汚染獣の咆哮は続く。

そしてそれをまた打ち消す金属音はこの世界の存在をより際立たせる。

それほどまでに二本の鎖が奏でる不協和音は存在感を放っていた。

「これは一体……。」

騎士団は念威操者によって確保された視界を必死に凝らして理解しようとするが彼らの知る常識ではこのような行いはできない筈だ、と拒絶に似た否定をする。

だが、グレイブは敢えて皆に、そしてこのような所業をしでかした男にこう叫んだ。

「漆黒の傭兵に感謝!!」

たとえこの声が聞こえずとも後で奴にはちゃんと礼を言わねばなど、グレイブは心の中で思い。

そしてまた散り散りになりかけた騎士団との思いを繋げる為に叫ぶ。

「俺たちの敵は、今日の前いるエルバを喰らおうとする汚染獣だ！
！ちっさい事考える前に集中し

る！！」

今度の叫びはシルビアの協力で全員に聞こえたようで、はいっ！と一斉に返事が返って来た。

ここまで揃ったのは初めてかもしれないと一人笑ったグレイブだったが、念威端子から恭介の催促が入ったことでダイトを握る手に力が入る。

そして騎士団に突貫の指示を出した。

勢いよく飛び出していく隊員達を見たグレイブはまた笑う。

（こんな最高の戦場で戦えるとは思ってもみなかった。）

その笑みは他者から見れば狂気の笑みに見えたであろう。

グレイブは体が熱くなって来て体が震えているのに気付いた

そう思っ初めてグレイブが今の状況に興奮していることが分かった。

湧き立ち、沸騰しそうな熱い血とドクドクと早打つ鼓動、それに従じる劉の奔流がグレイブの奥底で眠っていた獅子を呼び覚ました。

その獅子は暴れ出したい衝動に似て抗いがたい危険な闘争本能でグレイブに戦いをせがむ。

彼の中で本能と理性が拮抗しては理性が本能に流されるように負け、理性は剽と共に体外に溢れ出て行き地を削る。

腰を落とし力を入れ無ければ今すぐにも走り出しそうなグレイブだがこのまま本能に任せても面白そうだと笑みを深め飛び出すように走り出した。

己の本能に従い、闇を切り裂くように走った赤い光を纏った獅子は走る勢いそのままにいつも重かった大きなバスターソード型のダイトを軽々と頭へと振り下ろした。

汚染獣は反撃する間も無く頭から尻尾の先まで真っ二つになる。

二つになり緑色の血を噴き出す汚染獣の間でグレイブは理性を失くした獣のような笑みを浮かべる。

皆から送られる称賛の声も今はどうでも良く、「集中しろ」とだけ伝え次の獲物を探した。

もう汚染獣に対する恐怖心は無かった。

シルビアは久しぶりに見た。

（最強の闘争本能、真の武人。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3173n/>

漆黒の傭兵と火の化身

2011年1月30日16時44分発行